

広報PJからのお願い

『南森界限歴史探訪散歩』についてのご意見、ご感想をお待ちしています。ご所属、お名前を記載の上、以下のメールアドレスまで投稿ください。

info-shinsa◆osa-kendo.or.jp

上記メールアドレスは◆を@に変更後お使い下さい

掲載されている記事ごとに1 いいね 2 いまいちだね の選択投稿ができるようになっております。非常に簡単ですので多数のアクセスをお待ちしております。

PCの方は下記 URL へ（スマホも可）

<https://forms.gle/vTnXCywBHaqEm9eG8>

スマホの方は、下記 QR コードからアクセスできます。



従来のようにメールを利用されてもかまいません。

よろしくお願いします。

南森探訪南東コース事務所から天満橋駅編（広報誌7月号）をお届けします。内容は以下のようになっています。

・「第2回 南東コース 事務所から天満橋駅」編

大剣連事務局のある南森界限には多くの史跡があります。とくに武道をたしなむ私たちにとって、歴史的な武将や武術家と聞くと気になりますね。そこで、それらを中心に、少し離れた電車の駅と事務局とをつなぐようにめぐります。第二回目は南東コース 事務所から天満橋駅編をご紹介します。あなたも散策してみませんか。

（柴田洋一 教職員クラブ）

第2回 南東コース 事務所から天満橋駅へ(7月天神祭の時期) 南森界限歴史探訪散歩

趣味で歴史散歩を研究している剣道と居合道を嗜む教職員クラブの柴田洋一先生にまともて頂きました。皆様からの新しい発見、情報をお待ちしております。

Vol.002

2025.7.1 発行

発行責任者 公益社団法人
大阪府剣道連盟
広報PJ

前回第1回東コースの以下の修正をお願いします。

① 大政奉還、正しくは旧暦の10月(新暦なら11月) ② 桜宮公会堂、正しくは旧桜宮公会堂玄関(旧造幣寮鋳造所正面玄関)

さあ、もうすぐ7月25日の天神祭。天神さんとは、大阪天満宮祭神の菅原道真公のことで学問の神様。大阪市内では親しみを込めてそう呼ぶ。

今回は大剣連事務所で用事を終え、大阪天満宮を経て、天満橋・八軒家あたりまで足を伸ばしてみましょう。この天満南部の界限は江戸時代、寺社と町人地が隣り合っていた。

7月に入るといつもの落ち着いた風情とは違い、祭りが近いのでざわつきを感じる。事務所へ向かう途中、大阪メトロ南森町駅の東側3番出口から、天神橋筋商店街側へ上がった交差点で見上げる。祭の御迎(おむかえ)人形が南北に4体ずつ、交差点を挟んで商店街のアーケード端に飾られている。姿を見比べていると、いまにも掛け合って動きそうに見えるのは、見るひとのところがワクワクしているからなのだろうか。東方の大川沿いのOAPタワー(北区天満橋一丁目8-30)では、1階ホールで各町の祭提灯の展示が行われ、雰囲気盛り上げる。23日昼ごろからは、街なかで祭装束のハッピー姿のひとも見え始める。



南
羽柴秀吉
八幡太郎義家
佐々木高綱(真田幸村)
木津勘助



北
胡蝶舞
雀踊
三番叟
関羽



1 難波場 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	2 新町界限 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	3 松嶋崎 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	天神祭 お祭り提灯				4 千代崎横西詰 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	5 本町二番町 御成町 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	6 滝川町 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	
7 宮之前町 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	8 地下町 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	9 天神筋町 天満九丁目 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	10 此花町 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	11 天満市場 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	12 天神橋第一丁目 天満九丁目 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	13 市之瀬 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	14 鳴尾町 天満六丁目 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	15 樽屋町 天満宮神楽地 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	16 天満宮神楽地 天満宮神楽地 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	17 湯屋町 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日
18 西堀川町 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	19 伊勢町 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	20 老松町一丁目 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	21 老松町二丁目 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	22 錦之上町 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	23 若松町 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	24 真砂町 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	25 常島界限 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	26 曾根崎新地 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	27 安土町上通一丁目 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日	1 難波場 【祭】 祭日(祭) 17日 【祭】 祭日(祭) 17日

さて、用事を済ませて、★大剣連事務所から出る。若杉ビルの下で、強い陽射しに気づき、暑さに立ち向かう気持ちを起こす。日傘を差し、陽射しを避けながら右手南側のビルの角を折れ、右手西側へ進む。

突き当りのT字路は**此花町筋**。その正面は、①堀川小学校の東側にあたる。この地に1897(明治30)年ごろに建て替えられた洋風のハイカラな講堂が、1929(昭和4)年に大阪府南部の千早赤阪村小学校へ移築され、現在は愛知県犬山市の**明治村**に保存されている(千早赤阪小学校講堂、登録有形文化財、明治村2丁目14番地)。植村清志(2019)の研究で詳しい。江戸時代、学校西側の南北の筋が**大工町筋**で、天満宮の北門へ続いていた。

T字路の右手北側ビルの生涯学習ルームの壁に、天満宮の**ボーイスカウト募集**のポスターが長年貼られている。この少子化の時代に、神道系のスカウト活動が続けられているのは、天満の文化的特徴のひとつとを感じる。天満南部には、天満宮と寺町の寺院等を支える住民のエネルギーが、天神祭の継承や地域の人材育成・社会事業へとつながっている。

T字路の左手南側のビル1階にはスーパーのグルメシティ(もとダイエー系列)と、国道1号線に面して文具のディスカウントショップのフクヤが並ぶ。事務所の行き帰り、安いので日用品の買出しに助かる。

少し東側のコンビニ前から交差点を南側に渡って右手西側に折れ、天満宮の北門をめざす。大通りの国道1号線から左手南側へ折れて細い参道に入る。左側2軒めの words cafe には噺家のサインが壁一面に書き込まれている。

この天満宮の北門(大工門)手前の界限は、**天満天神裏**といい、約150年前の明治初年までは境内地であった。以前は演芸や飲食の小屋が約50軒並び、中でも寄席小屋は**天満八軒**と呼ばれた。

門の左手東側が、上方落語の定席②**天満天神繁昌亭**である。軒にはたくさんの提灯が飾られて賑やかな印象だ。敷地の手前角に由来が刻まれた石碑がある。上方落語の始まりは、江戸時代前期、京都では1680年ごろに**露の五郎兵衛**(1643-1703)が**北野天満宮**で、大坂では**米澤彦八**(生没年不詳)が**生國魂神社**(天王寺区生玉町13-9)で**辻噺**(つじばなし)を行ったと伝えられる。大坂三郷で落語の定席は1800(寛政12)年ごろから始まったが、1945(昭和20)年の**第二次世界大戦**での空襲ですべて失われた。その後、2006(平成18)年、61年ぶりにこの地で復活した。彦八については『天下一の軽口男』(幻冬舎)に詳しい。

門の右手西側の駐車場は、お笑いの③**吉本興行発祥の地**。とくに石碑等は見当たらない。1912(明治45)年4月に吉本吉兵衛・せい夫妻が第二文芸場を始めた。落語と踊り等、娯楽性の強い出し物で人気を博した。その後、演芸場を次々を買収し、経営を拡大。1915(大正4)年には、道頓堀南の法善寺へも進出して南地花月を開き、天満は天満花月を名乗った。

NHK朝ドラの主人公のモデルとして、2017(平成29)年後期の「わろてんか」では吉本せい(1889-1950)、2023(令和5)年後期の「ブギウギ」では歌手笠置シズ子(1914-1985)とせいの長男の話が思い出される。いまは、このあたりを黒猫がうろついて、外国人観光客らに愛嬌を振りまいている。



さて、繁昌亭の北側の小道を東へ鍵型に進む。すると左手北側に、縁結びで有名な④星合池がある。かつては池にかかる橋の上が、行き違う男女のお見合いの場として利用されたらしい。橋を渡ると奥には茶店と小さな祠や蔵がある。実はここが、前回ご紹介した川崎東照宮の一部移転先である。東照宮例祭が天満宮で5月17日に催される。



もとの繁昌亭前に戻って、北門から大阪天満宮へ一礼して入る。石碑や絵馬、登竜門等、境内をはじめ、周辺に見どころが溢れている。何度来ても飽きないところが魅力。トイレは右手西側にある。

天満宮の地には、先に⑤大將軍社が祀られていた。645(大化元)年に、難波長柄豊碕宮が造営された際に、鬼門にあたる四方に大將軍社が置かれた。その一つが西北にあたる摂津中島の明星池の畔にあった。文章博士・大学頭で右大臣の菅原道真(845-903)が左大臣の藤原時平(871-909)の策略によって、901(昌泰4)年に左遷された(昌泰の変)とき、九州の太宰府へ下る途中に参詣した。949(天曆3)年に社前で起きた不思議な話を、村上天皇(926-967)が菅原公ゆかりの奇譚として勅命で、大將軍の森に天満宮を鎮座した。この森が、南森町の地名の由来。江戸時代はじめの寛文年間(1661-1673)に現在地に移された。



門を入ってすぐ左手東側の⑥北門灯籠の台座正面に、遊侠・小林佐兵衛(1830~1917)の名を見つける。彼は小説家・司馬遼太郎(1923-1996、記念館(東大阪市下小阪三丁目11-18、06-6726-3860))の小説『俄-にわか』のモデル。通称は明石家万吉。実父は、幕府隠密で、京都の公家が営む高利貸として大坂に潜伏した人物。彼が9歳のとき父が失踪し、残された母と妹と困窮の中で、賭場荒らしから遊侠の道へと進んだ。並行して、剣術を太融寺(真言宗、北区兎我野町、淀君墓所)の裏境内で、神道無念流目録の吉井又右衛門(生没年不詳)から学んだ。彼は不屈の精神と生来の体力で数々の困難を乗り越え、地元で頭角を現した。



で頭角を現した。並行して、剣術を太融寺(真言宗、北区兎我野町、淀君墓所)の裏境内で、神道無念流目録の吉井又右衛門(生没年不詳)から学んだ。彼は不屈の精神と生来の体力で数々の困難を乗り越え、地元

当時の任侠は、時代劇では賭博行為等のマイナス面がよく伝えられるが、実は幕府関係や地域産業での労働供給をはじめ、揉め事や米価変動等の調節等、プラス面の社会的機能も果たした。

さらに、幕末の動乱期、1853(文久3)年に彼は播州小野家一柳藩に雇われ、足軽頭として小林佐兵衛と名乗った。市内西部の尻無川と安治川の警備に就いたとき、1864(元治元)年7月の禁門の変で落ち延びる長州藩兵を逃がした。1868(慶応4)年1月鳥羽・伏見の戦い後に、それまで旧幕府に協力した市中の任侠たちが、新政府によって処刑された際、佐兵衛はかつて逃した桂小五郎(1833-1877、長州藩、神道無念流免許皆伝、練兵館塾頭)によって助命された。

また、1873(明治6)年には、大阪府知事の渡邊昇(1838-1913、肥前大村藩、神道無念流免許皆伝、練兵館塾頭、近藤勇とも親交、薩長同盟の斡旋役、大佛次郎の小説『鞍馬天狗』のモデルの一人、大日本武徳会範士)の認可で、北消防頭取となった。1885(明治18)年には維新の混乱で生まれた孤児たちを世話するため、小林授産場(現北区茶屋町一丁目あたり)を開き、社会事業(今で言う社会福祉事業)を始めた(~1912年)。また、1896(明治29)年、自宅に救助場(救い小屋)を置き、費用を橋梁の清掃請負の費用で賄った。

同年5月、木村重成顕彰碑を中之島の豊国神社東側に建てた。台座には、彼の名が、大阪府知事の西邨捨三(1843-1908、彦根藩)と連名で刻まれている。撰文によると、国事の手本は、楠木正成(1294-1336)と木村重成

(1593-1615)。徳川方の井伊家彦根藩は、1615(慶長 20)年大坂夏の陣の**若江の戦い**で豊臣方の木村重成を討ち取ったが、藩主**井伊直孝**(1590-1659)が若い大将の手本とせよと伝えた。西邨は、戊辰戦争で旧幕臣の大久保大和(もと新撰組局長の**近藤勇**(1834-1868、天然理心流)の変名)の捕縛に立ち会ったことがある。

さらに、小林は1909(明治 42)年の**天満焼け**では、配下の人足を率いて天満宮を火から守った。天満宮は、江戸時代に記録に残るだけで7回焼失していた。1837(天保 8)年の**大塩焼け**では全焼し、献身的な人びとによって1843(天保 14)年に現在の**⑦天満宮本社**が再建された。小林たちは、過去の災害から学び、繰り返さないための活動を行った。その後、1945(昭和 20)年3月から8月、第二次世界大戦の空襲では火災を免れている。



後年、小林について、1959(昭和 34)年に毎日新聞記者の**村嶋歸之**(よりゆき、1891-1965)が「大阪の社会事業昔ばなし」と題した連載の第1回目「浪花任侠の社会事業?!」で記事にした。村嶋の学生時代の友人・小林徳三の父が佐兵衛であった。村嶋は、**瀧口帰一**(よりかず、1847-1913、豊後杵築藩)の三男で、大和高田の商家であった母方の姓を継いだ(母方の女性が幕末の志士・若狭国小浜藩の**梅田雲浜**(1815-1859)の後妻だった縁で、雲浜は安政の大獄で捕縛されるまで婚家の商売を手伝った)。村嶋の父・帰一は、国元で鹿島神伝直心影流の剣術・柔術を修行後、1870(明治 3)年末、大阪の杵築藩屋敷から、**鏡新明智流の四代・桃井直正**の道場へ通い、翌年免許皆伝。**最後の師範代**として、大和国櫛羅藩(くじらはん、譜代永井家 1 万石)・芝村藩(外様織田家 1 万石)に出稽古。同年の廃藩置県後、堺県と奈良県での官吏を経て、1898(明治 31)-1902(明治 35)年に衆議院議員を務め、奈良県の治水事業に貢献した。

さて、**天満宮と新撰組**については、案外知られていない。1867(慶応 3)年 12 月 9 日の王政復古の大号令を受けて、同月 13 日夜に徳川慶喜が家臣らと京都の二条城から大坂城へ移動。それに伴って、同月 14 日から護衛役の**遊撃隊**は天満与力・同心の役宅を、新撰組は大坂天満宮を宿所とした。

指揮は局長の**近藤勇**がとった(伏見の墨染で狙撃されたのは同月 18 日)。境内には、副長の土方歳三(1835-1869、天然理心流)、**斎藤一**(1844-1915、撃剣師範役、無外流ほか)、**永倉新八**(1839-1915、撃剣師範役、神道無念流ほか)、**島田塊**(1822-1900、心形刀流)や大坂出身との説がある**山崎丞**(すすむ、生年不明-1868、香取流棒術ほか)らもいた。その後、彼らは、天神橋北詰での警備のため、橋までの間を行き来したのだろう。その後、12 月 16 日からは、京都南部の要所・伏見奉行所へ入り、京都市中の薩摩藩らの不穏な動きを見張り、翌年 1 月 3 日の**鳥羽・伏見の戦い**に至った。



天満宮の南西の門は、**戎(蛭子、えびす)門**という。門の南側には、由来の碑文やお神酒笑姿(えびす)の石像、**⑧大阪ガラス業発祥之地碑**がある。ガラス業については、1751(宝暦年間)、長崎商人の播磨屋清兵衛が、天満宮鳥居前工場を設け、玉屋を開業したと伝えられる。明治初年には、天満中部の与力・同心町にガラス工場が立ち並んで、地域社会を支えた。表面を U 字形に彫る柔らかい輝きが特徴の名品・**天満切子**の工房が、近所にある由縁である。

この門を出た南側の道は**表門筋**。ここでは車は左への一方通行を守る。

因みに、門から右手西側へ進むと、**天神橋筋商店街**へ通じる。左手角の南側の道は、商店街 1 丁目のアーケード下から、**てんいち商店街**、**天神橋**へと通じる。途中、右手角の五島ビル(北区天神橋一丁目 19)の 2 階壁の看板には、4 階に古武道教室(**肥前春日流春日会**)とある。入口に剣術、杖術、柔術、空手の案内。

さっきの表門筋と商店街の右手角から右手北側の道は、商店街 2 丁目から大阪メトロの南森町駅方面に通じる。少し進むと右手に **CAFE 大阪茶会**(北区天神橋二丁目 1-25, 06-6755-4789)がある。店の前には芸術等のチ

ラシが並べられ、店内左壁一面には茶器、天井近くには全国の焼きものマップ(オリジナル)。右側はカウンターで、正面奥の黒竹枠の本棚の奥にカフェとサロンスペースがある。コンセプトは「市中の山居(さんきょ)」。隠遁生活のような静寂を感じることができる。ひと・緑茶・器が一期一会を楽しむ、新旧・和洋とがコラボしたアートな空間。さる人間国宝や近所の美術館館長等、芸術関係者がふらっと気軽に立ち寄る。ドイツをはじめ、世界中から、お茶や器等の日本文化に憧れるリピーターが集まる。置かれた地球儀に貼られた印は彼らの出身地を示す。天満界限から緑茶ファンの輪を広げ、世界中に美味しいお茶を届けたいと店主の話は尽きない。物販に加え、メニューは、挽きたて茶のセルフミキシングや名物プレミアムぜんざい、和歌山発祥の抹茶ソフト等、オリジナリティに溢れている。

もとの天満宮の表門筋に戻って、南門(表大門)の内側の天井を見上げる。飾られているのは、**⑨十二支の方位盤**。珍しいのが、西の方位に「鶏」ではなく「鳳凰」になっていること。理由は、菅原道真を巡る故事による。菅原道真が、太宰府へ下る途中、河内の道明寺にいた叔母(覚寿尼)と、早朝の別れを惜しんで詠んだ、「鳴けばこそ 別れも憂けれ 鶏(とり)の音の なからん里の 暁(あかつき)もがな」によって、鶏を避ける配慮と伝えられる。この場面は、1746(延享3)年、大坂竹本座で初演の人形浄瑠璃(文楽)『菅原伝授手習鑑』(日本三大名作のひとつ)で有名であった。



門前の道路と境内地との境界を示す柵の角柱の角や灯籠の透かしの意匠は、天満宮を示す5枚の梅の花弁。

さて、天満宮の南門から左手東側へ、出てすぐ左手角に、**⑩西山宗因向栄庵跡碑**が建つ。西山宗因(1605-1682)は、父が武将加藤清正(1562-1611)の家臣で肥後国生まれ。1642(寛永19)年に来阪し、天満宮東辻に庵を結んだ。1647年(正保4)年、大坂天満宮連歌所の宗匠となる一方、俳諧をはじめた。**井原西鶴**(1642-1693)、**上島鬼貫**(1661-1738)ら、多数の門人を輩出し、俳諧の談林風を盛んにした。

さらに、2ブロック進む間の右手南側のマンション植込みには、**⑪川端康成生誕之地碑**が建つ。彼は1899(明治32)年6月14日、料亭相生楼前の此花町一丁目79番屋敷(現北区天神橋一丁目16-12)で生まれた。育ちは、三島郡豊川村宿久庄(現茨木市宿久庄)。小説家として、『伊豆の踊り子』(1926)『雪国』(1935-1948)等を著し、1968(昭和43)年に日本人初のノーベル文学賞を受賞したことで有名(1972年没)。



3ブロックめの角を左手北側へ南北の**滝川町筋**へ入る。**⑫中国酒家 福龍園**(北区天満四丁目16-8 ハイッ天満宮1階, 06-6353-7224)は赤色の看板に黄色い文字。名物の辛い**担々麺**をいただくと汗びっしょり。ご主人は**甲冑研究会**会員。物知りでお話上手なのでお客さんが集まる。ここは**事務局長の木部さん**にご紹介いただいた。

つぎに、店頭から南側へ戻り、つぎの角を右手西側へ折れて表門筋へ入り、すぐにつぎの角を左手南側へ折れて**此花町筋**を進む。すると、左手に外壁がコンクリートの打ちっばなしのビルが、公益社団法人**⑬上方落語協会会館**。前を通るときに、誰か有名な噺家に出会えるかも知れない。その前をさらに南側へ進んで、つぎの角を左手東側へ**鳥居筋**を2ブロック進む。

すると、**滝川公園**(天満四丁目7)の北西植込みに、江戸時代の大坂三郷のひとつ、**⑭天満組惣会所跡碑**がある。碑文によると、本当の場所は北西隣(天満四丁目13)の一角であった。公園の敷地北側には、滝川公園地域集会所・老人憩の家が設けられ、いまでも地域のため利用されている。公園北側の鳥居筋は、天満橋筋と天神橋筋の東西の抜け道で、案外交通量が多い。

同じ公園の中央東側の植込みに、**⑮天満興正寺跡碑**がある。鎌倉時代の1264(文永元)年から天満の地にあったが、織田信長(1534-1582)と大坂本願寺(浄土真宗)との**石山合戦**(1570-1580)ののち、和泉に引き上げたが、豊臣秀吉に許されて再び1585(天正13)年、浄土真宗の天満本願寺(現造幣局あたり)とともに、広大な敷地に建立された。1837(天保8)年の大塩平八郎の乱で焼失したが、1856(安政3)年に再建。1887(明治20)年4月から1903(明治36)年11月までは**関西法律学校**(現関西大学)の校舎となった。1945(昭和20)年に空襲で焼失、1965(昭和40)年大阪興正寺別院と改称して旭区赤川4丁目(さらに1988(昭和63)年高槻市奈佐原)へ移転した。



関西法律学校のはじまりは、1886(明治19)年に、自由民権運動家の**吉田一士**(1858-1891)が中心となり、大阪に法律学校の認可を求めた。きっかけは、前年に自由党左派が起こした**大阪事件**のために、**大阪控訴院**(現北区西天満二丁目1-10)に置かれた臨時重罪裁判所に検事たちが赴任したことだった。彼らが協議に加わり、大阪控訴院長だった**児島惟謙**(これかた、1837-1908、のち大審院長)が賛同して、11月に**願宗寺**(浄土真宗、現西区京町堀二丁目3番付近)に開かれ、12月から修業年限3年、始業16:30の夜学として始まった。当初、独自の校舎を持たなかったため、一時、天満興正寺に置かれた。

その児島惟謙は、宇和島藩士の子で、幼い頃から剣術に秀で、同郷の**土居通夫**(1837-1917、剣豪商人、のち大阪財界の指導者)と窪田派田宮流の剣術修行に励んだ。1865(慶応元)年、長崎で**坂本竜馬**(1836-1867、土佐藩、北辰一刀流)・**五代友厚**(1836-1885、薩摩藩、示現流)らと親交、脱藩して京都に潜伏。勤王派として活動し、戊辰戦争にも北陸道軍として参加した経歴の持ち主。のちに、ロシアの皇太子ニコライ(1868-1918、のち皇帝ニコライ2世)が滋賀県大津市で切りつけられた**大津事件**を審判し、**司法権の独立**を守って日本の国際的地位を高めた。一方、土居通夫は、窪田派田宮流の免許皆伝後に、坂本竜馬の勧めで脱藩。大坂で商家の用心棒兼出納役として評判となったのち、鳥羽・伏見の戦いでの功績で帰藩が許された。明治維新時、**大阪外国事務局運上所**(現西区川口)での勤務で五代友厚(のち大阪商法会議所の初代会頭)と出会い、大阪の財界に入るきっかけとなった。土居も関西法律学校の創設に関わった。土居の邸宅跡の場所は、現在の日本銀行大阪支店(北区中之島二丁目1-45)にあたる。土居は、司馬遼太郎の小説『幕末』収録の「花屋町の襲撃」に登場する後家鞆の彦六のモデルでもあった(実際には陸奥宗光(1844-1897)が起こした1868(慶応3)年の天満屋事件には参加していない)。また、**五代と土居(七代会頭)の立像**が大阪商工会議所(中央区本町橋2-8)南側に並んで建っている。五代の立像の手の構えは、幼いころから友人の黒田清隆(1840-1900、薩摩藩、示現流皆伝、師範代)と修行した示現流を表すと伝えられる。

公園南側から右手西側へ**魚棚筋**を5ブロック進んで、大通りの**天神橋筋**を左手南側へ進み、大川端へ向かってみよう。川から涼しい風が吹いてくる。

この川辺りは、かつて古代に**⑯難波堀江**と呼ばれた。『日本書紀』によると、4世紀、**仁徳天皇**(290-399)が行った堀江の開削と茨田堤の築造は、大和朝廷最初の大規模な土木事業だったとされる。その後、『善光寺縁起』によると、6世紀半ば、**崇仏廃仏論争**で、**蘇我稲目**(506-570)と争った**物部尾輿**(生没年不詳)により飛鳥の寺が焼かれ、仏像が投げ込まれたのが難波の堀江。その後、7世紀はじめ、信濃国から国司に従って都に来た**本田善**

光(よしみつ、生没年不詳)が、川底の仏像からの呼びかけに応じて引き上げ、故郷で祀って善光寺本尊になったという。縁起には諸説あり、百済王善光が本多善光と名乗ったとも伝わる。

関連して、**古代の難波津**について、2022(平成 24)年の発掘調査で天神橋の南西(中央区北浜東四丁目 33、ルポンドシェルの南筋向かい)で、東西方向に**古代の大溝跡**(地図左下の**黒色太枠部分**)が見つかり、7 世紀前半から 8 世紀にかけて大量の遺物が出土した。

⑩天神橋あたりは**中世の渡辺津**との説がある。2004(平成 16)年までの大阪市文化財協会の発掘調査で、橋から南西方向に離れた中央区**道修町通**の付近(地図左下の**赤色太枠部分**)が、東西方向の入り江の地形であったことが分かった。周辺からは、飛鳥から奈良時代、鎌倉から室町時代の遺構・遺物が多く見つかかり、港湾機能として相応しい場所と考えられた。

渡辺の地は、平安時代中期の武将、嵯峨源氏の**渡辺綱**(953-1025)の本貫地。彼は**大江山の鬼退治**で有名な**源頼光**(948-1021、清和源氏)の四天王のひとり(童話の**金太郎**で知られる坂田金時(956-1011)も)。渡辺の旧地の名残りを留めるのが、**坐摩(いかすり)神社元宮・行宮**(御旅所、中央区石町(こくまち)二丁目 2-15、熊野詣第一王子跡、地図中央下の**長四角枠の右上部分**)。坐摩神社は古来、**摂津国一之宮**であったが、**豊臣秀吉**(1537-1598)の大坂城築城にあたり、1582(天正 10)年に移転を命じられ、寛永年間(1624-1644)に現在地(中央区久太郎町四丁目渡辺 3 号)に鎮座した。地名も移され、**全国の渡辺・渡部姓の発祥地**とされる。



あとで訪れる北大江公園近くでは、南東方向にある中央高校敷地(釣鐘町一丁目 1-5、1990(平成 2)年大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査 OS90-50 次調査)から、奈良時代後半～平安時代初めの 7 棟の正方位の掘立柱建物と井戸・溝などが検出された。これらの遺構は「揚」「厨」と記した墨書土器などから、大化の改新(645)後に設けられた**⑪摂津職関連地**と考えられた。グラウンド東隣のマンション敷地(2015(平成 27)年 OS11-4)からも、同時期の掘立柱建物の遺構が見つかり、この周辺に重要な施設があった可能性がさらに高まった。先に述べた難波津や渡辺津と、その港を管理する摂津職(677 ごろ-793)とが、東西に配置されていた可能性も。



さて、天神橋を渡るのは別の機会に。今日は北詰から、南側を遠く眺める。

天神橋は、1594(文禄3)年に架けられ、大坂天満宮が管理した。1634(寛永11)年、幕府管理の公儀橋のひとつとなり、**浪華三大橋(西の難波橋、天神橋、東の天満橋)**にも数えられ、その風景は『浪華百景』(歌川国員)にも描かれた。三橋のうち全長が最も長く、童歌に「天神橋長いな、落ちたらこわいな」と歌われた。1885(明治18)年に大洪水で木橋が流され、1888(明治21)年に材料がドイツから輸入されて鉄橋が架けられた。当時の**鉄橋の飾り板**が北詰西角に保存されている。1915(大正4)年に治水のため、橋の下まで中之島が伸ばされ、北側に堂島川と南側の土佐堀川に分流された。東側へ伸びてできた**剣先公園**には、第一次世界大戦時の軍艦「最上」廃艦後に**後艦橋とマスト**が1929(昭和4)年から2009(平成21)年まで飾られた。1934(昭和8)年、橋の南詰からはじまる松屋町筋の拡幅工事に合わせて架替えが行われ、橋の全長が219.7mとなった。

橋の南詰あたりは、**⑮内山彦次郎暗殺地**である。内山彦次郎(1797-1864)は、幕末に**大坂西町奉行所与力**の最上位で、譜代御家人でもあった。犯人には諸説あり、**新撰組犯行説**では、大坂相撲の小野川部屋の力士との乱闘事件を巡る確執や、尊皇攘夷の志士と結んで物価を釣り上げていると疑われたことが理由とされた。

橋の南詰から南東側の一角には、江戸時代、**紀州藩屋敷**(中央区北浜東3-9、現日本郵便近畿支社)があった。紀州藩の参勤交代は、4月の諸大名の混雑を避けて3月に行われた。**徳川御三家**の威信をかけ、豪華絢爛な大名行列が出入りする景色は圧巻だっただろう。その**参勤交代行列図**は堺市立博物館や和歌山市立・県立の博物館に残されている。いまはビルの北西角に**前島密**(1835-1919、幕臣で開成所教授、日本近代郵便の父)の胸像が建つ。彼が養子に入った前島家は、**京都見廻組**の役目で亡くなった旗本前島錠次郎の家。

さて、天神橋北詰から東の天満橋へ向かおう。北詰東角には交番、続く左手東側の菅南福社会館、東隣に公衆トイレがある。地名の菅南は、菅原道真を祀る大阪天満宮の南に由来する。

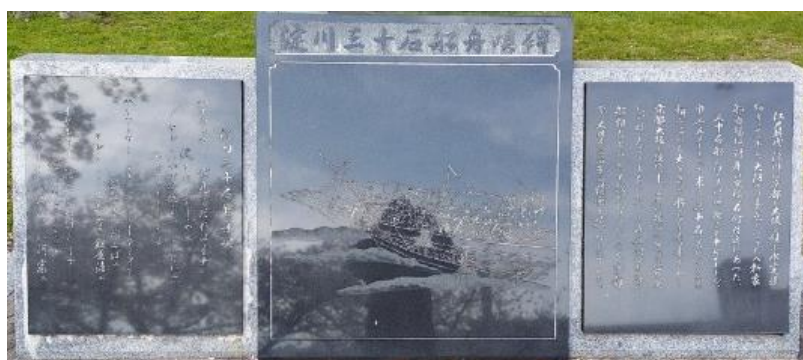


川辺りの道は北区第8228線で、右手南側には南天満公園が大川沿いに広がる。公園は比較的幅が広く、東方の天満橋まで、桜並木が続く。夜には川面が青白くライトアップされる。対岸に八軒家浜船着場や京阪モールが見える。あとで行ってみよう。

橋から歩いて2つめのT字の辻(3面ある南天満庭球場の西端)から、辻ごとに、**⑯旧町名継承碑**を公園の柵の間に見かける。順に、**市之町**(天満青物市場に由来)、**此花町一〜二丁目**(由来は古歌「難波津に咲くやこの花冬ごもり 今を春べに咲くやこの花」)、**滝川町**(もとは、天満惣会所や滝川小学校の所在地)、**河内町一丁目**、**壺屋町一丁目**(古くは茶染町。その後、酒蔵があった。それらの関係で、壺や瓶かめが販売されていた)。



壺屋町の継承碑がある信号の交差点が、公園の中程にあたる。継承碑の横から公園の階段を下りると、左斜め方向に**⑰天満青物市場碑・天満の子守歌の碑文・淀川三十石船舟唄碑**を続けて見ることができる。





天満青物市場は、中世の**大坂本願寺**(1533-1580)の門前に、郊外の野菜や果物が近隣の水運を利用して集まったのがはじまり。その後、移転を重ね、近世の江戸時代には、大坂町奉行により、1653(承応2)年天神橋から天満橋の大川北岸に置かれ、1685(貞享2)年には54軒の間屋があった。**堂島米市場**(石碑は現北区堂島浜一丁目堂島公園)、**雑喉場(ざこば)魚市場**(石碑は現西区江之子島一丁目江之子島公園)と並ぶ**大坂三大市場**として賑わったが、1931(昭和6)年に**大阪市中央卸売市場**に

吸収された。子守歌は「ねんねころいち 天満の市で 大根揃えて舟に積む」で知られる。三十石船は、町奉行の過書奉行の支配下で、京の伏見と大坂の八軒家を結んで、ひとや物資を運んだ。積載量が米三十石に相当した。漕ぎ手4人で乗客28名。行きは早朝に八軒家を出て、夕方、伏見に着き、帰りは行きの半分の時間で、夜に伏見を出て、早朝、八軒家に着いた。舟唄は漕ぎ手の船頭が歌った。船運は、明治時代に蒸気機関の外輪船に取って代われ、姿を消した。2002(平成14)年に**府の無形民俗文化財指定**。子守歌も舟唄もネット検索で音源から聞くことができる。

もとの階段を上がって、公園の柵沿いに東へ進む。すると、辻の右手柵に、旧町名継承碑が順に、**龍田町**、**岩井町一丁目**、**信保町一丁目**(由来は売薬の名)、**朝日町**、**金屋町一丁目**(由来は天満組惣年寄金屋氏宅)と見ることができる。



公園東端の川辺りの植込みには、**②将基島粗朶水制(しょうぎじまそだすいせい)跡碑**がある。これは川水の逆流を防ぐ護岸堤防。

1874(明治7)年に設けられ、治水に役立った。

公園を出て、天満橋北詰の西角向かい側にある**②日本分析化学専門学校の説明板**に気づく。その1階の南側に化学者3人の紹介が掲げられ、つぎのように書かれてある。

右から、**宇田川榕庵**(1798-1846)岐阜。オランダ語の「Chemie」を「舍密」と音訳し、1837年に『舍密開宗』を出版。ほか、酸化、

還元、酸素、水素、窒素等の元素記号を日本で初めて紹介。日本初舍密を化学と命名。

川本幸民(1810-1871)兵庫。1861年に化学新書(1864年ドイツのシュテックハルト著)を訳出し、Chemistryを化学と訳した。日本で初めて、元素記号を漢字一文字で表し、化学反応式を記した。

日本初化学学校 舍密局教頭クーンラート・ウォルテル・ハラタマ(1831-

1888)オランダ。1866年来日し、長崎養成所附属の化学教室「分析究理所」の教官として化学教育を行った。1869年には、日本初の化学学校「舍密局」を大阪天満に開校し、教頭として、帰国する1880年までの間毎日、化学講義・実験を実施した。

記述の**舍密局**の本当の場所は大手前で、大阪天満川崎(現造幣局内)にあったのは、1869(明治2)年創設の**洋学校**で、大手前にあった舍密局が明治3年に改称してできた**大阪理学校**と合併して明治4年ごろ**開成所**(さらに改称や合併を繰り返し、京都に移転して**第三高等学校(現京都大学)**)となった。



現在、舎密局跡碑とハラタマの胸像は、大阪府庁の大手前合同庁舎(中央区大手前三丁目1)の南西植込みにある。本当の場所は約200m北の大阪府庁本館あたりで、大手前広場に面していた。

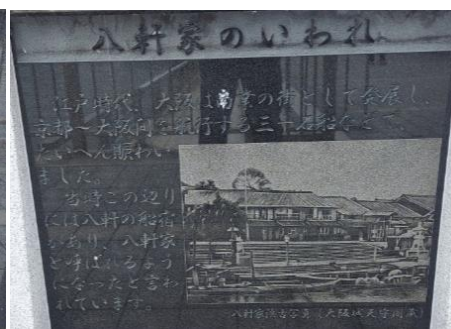
大川の水面を渡る川風を感じながら、**②天満橋**を渡る。夜には橋梁が青白くライトアップされる。南詰では、南側の横断歩道を渡らずに、右手西側へ折れて川筋へ下りる。川に沿って遊歩道を進むと、大きな**②灯籠**2基に気づく(2012(平成24)年7月寄贈)。

東燈籠の側面に説明が記され、西から東へ時計と反対回りに、八軒家のいわれ、燈籠の由来、京屋と堺屋(2軒とも幕末の宿屋)を見ることができる。

西燈籠の側面にも説明が記され、西から東へ時計と反対回りに、八軒家の歴史、熊野街道の起点・九十九(つくも)王子、熊野街道地図を見ることができる。

ふたつの燈籠の間の陸側には、かつての船着場をイメージさせる、幅広の階段があり、ベンチで休憩しながら、12:00-22:00に毎時2回(00分、30分)等の定時には**水と光の噴水ショー**を楽しむこともできる。これは2025(令和7)年3月から3カ所で行われている「OSAKA リバーファンタジー」事業のひとつ。大川右岸の護岸沿いに幅約100m。世界初のフロート型超大型噴水ショーで、50台のノズルが織りなす日本初立体演出である。ほかの2カ所は中之島 GATE のLEDビジョン(安治川沿い大阪中央卸売市場の南側)、東横堀川のプロジェクション・マッピング(高麗橋～本町橋)。

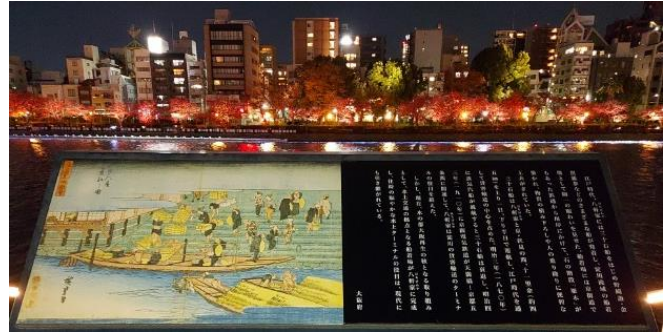
階段の東側の高台は、「天神橋と常夜灯を眺める川の駅はちけんや」として景色が素晴らしいスポットで、ビュースポット OSAKA に



選定された。

1階の②④「川の駅」はちげんや(八軒家浜船着場)へ入る。ここは観光船案内所で、日本初の水陸両用観光バス・大阪ダックツアーの待合&休憩スペースへ入る。その上の2階は、大川の堤防上と同じ高さ。そこには、天下の台所大起水産八軒家浜(まぐろスタジアム)も併設されている。

ここで少しトイレ休憩。休憩にかこつけて景色を楽しむ。店内だと窓際席から、店外だと西側の階段上あたりから。まず、左右に広がる大川端のパノラマに目を奪われる。改めて、視線を左の天神橋から右の天満橋へ、そして手前の遊歩道から向こう岸の南天満公園へと移してみる。



ここは時間がゆっくり流れている。遊歩道ではゆっくりのんびりと歩くひとびと、大川の水面上では水鳥が浮かんだり、ゆったりと翔んだりするのが自由で、眺めるひとまで心地よい気分になる。その中で、ハッとさせられるのは、飛び立とうとして水しぶきを上げながら低い軌道で飛翔する姿だ。我に返り、景色に癒やされているのに気づく。

大起水産の左手東側に錦絵が載った八軒家の説明板がある。天満橋南詰は古くは八軒家船着場と呼ばれた。由来は中世のはじめ、平安時代末の院政期に、船着場に八軒の宿屋が軒を連ねた。皇族や貴族たちが熊野詣・高野詣のため、熊野街道や高野街道へと往来して繁盛した。



説明板から少し離れて左手東側に②⑤小楠公顕彰碑がある。小楠公とは、中世の14世紀はじめに活躍した楠木正成(1294-1336)の息子の正行(まさつら、1326-1348)のこと。天王寺の戦いで勝利し、敗走して大川に落ちた敵を救った逸話の舞台がここと伝わる。

振り返って、南側の交差点へ向かう。交差点の南から、正面の坂の右手西側の歩道には歴史の散歩道の伝い石が埋め込まれ、散歩の目印となる。この坂を大江の坂と呼ぶ説がある。この南北の筋はお祓い筋。由来は、沿道の人びとが道の掃除を行い、皇族や貴族が熊野詣や高野詣に向かう前に第一王子でお祓いを受けて歩いたからと伝わる。





さて、幕末に船宿が、天満橋南詰から西側にかけて、東西に 10 軒並んでいた。交差点南東角(天満橋京町 3)から東西の歩道には、レトロなデザインの街灯が並ぶ。福助ビルからドクターデヴィアス化粧品株式会社ビルのあたりには、船宿が 2 軒並んでいた。角の船宿・**②⑥堺屋源兵衛**は、京都伏見の寺田屋と提携し、坂本竜馬ら勤王の志士の定宿で、東隣の船宿・**②⑥京屋忠兵衛**は**新選組**の定宿。幕末の動乱期に起きた相撲取りとの乱闘騒ぎや内山彦次郎暗殺の前後にも利用されたといわれる。さらに明治維新の**鳥羽・伏見の戦い**後には、深手を負った隊士の山崎蒸らが運び込まれた。

さて、左手東側へ進むと、少し離れた**永田昆布店**前に**②⑧八軒家船着場跡碑**がある。ここで案内の小冊子を拝見し、ネット情報の QR コードをスマホに写す。
(出典：八軒家小冊子(改訂版)永田屋昆布)

<https://apac01.safelinks.protection.outlook.com/?url=https%3A%2F%2Fwww.nagatayakonbu.jp%2F%25E5%2591%25A8%25E8%25BE%25BA%25E3%2581%25AE%25E6%25AD%25B4%25E5%258F%25B2%2F%3Fmobile%3D1&data=05%7C02%7C%7C98a393dea5e74c6e11a108dda0c8e647%7C84df9e7fe9f640afb435aaaaaaaaaaa%7C1%7C0%7C638843506938053316%7CUnknown%7CTWFpbGZsb3d8eyJFbXB0eU1hcGkiOnRydWUsIlYiOiIwLjAuMDAwMCIsIlAiOiJXaW4zMtIsIkFOIjoiTWFpbGlldUljoyfQ%3D%3D%7C0%7C%7C%7C&sdata=aliP8t6w1u5OyC1ba%2BPN6CiMJIW61Jhmv4KfN1GK2ok%3D&reserved=0>

振り返ると筋向かいの北側には、松崎屋など数軒の居酒屋や酒場が並ぶ。

つぎに、店の右手西側から、天満橋京町 3 の角へ進み、左手南側を向くと、**②⑧八軒家浜の石段**の名残りがある。上町台地の北の崖である。高度計で測ると、下の道路の海拔高度が約 11m。石段の上は約 25m で約 14m 高い。手前のビルと比べると 3 階半の高さにあたる。

石段を登ってみよう。上りきると、正面に**北大江公園**が東西に広がっている。この公園では、毎年 4 月の桜をはじめ、さまざまな花を楽しむことができる、近所の親子連れや



勤め人たちの憩いの場である。

階段上の左手東側のマンション植込みに**②⑨三橋楼跡の説明版**(石町一丁目 1)がある。幕末から明治中期にあった高級料亭で、浪華三大橋(西から難波橋・天神橋・天満橋)をこの高台から眺望できることで有名であった。1875(明治 8)年 1 月 8 日に**大阪会議**に向けて、**大久保利通**(1830-1878、薩摩藩、内務卿)と**木戸孝允**(もと桂小五郎)による第一回会議が行われた。この地は、のちにハリストス教会が建てられた。

公園南側には日本料理の**③⑩大乃屋**(島町 1 丁目 3-5)が料亭の名残りを留める。



実はこの北大江公園あたりは、**安土・桃山時代の③大坂南蛮寺推定地**だ。説明板等は見当たらない。1583(天正 11)年、豊臣秀吉が宣教師**オルガンティノー**(1530-1609)に、天満橋付近の見晴らしの良い二千坪の土地を与えた。キリシタン大名の**高山右近**(1552-1615)が経費を負担して、畿内で最も美しいと言われた河内岡山(現四條畷市岡山)の教会堂を移し、1585(天正 13)年に壮麗な教会(南蛮寺)が完成した。

多くの人が見学に訪れた。右近はすぐそばに館を建て、布教に務めた。**蒲生氏郷**(1556-1595)や**黒田孝高(如水)**(1546-1604)らが洗礼を受けた。右近は**千利休**(1522-1591)の高弟 7 人のひとりでもあり、多くの弟子たちや**古田織部**(1544-1615)らも影響を受けた。**細川ガラシャ**(1563-1600)が生涯でただ一度訪れたのもこの教会堂と考えられる。

記録によると、キリシタンが多かった地域は、摂津と河内の国では、いまの高槻、茨木、四條畷、八尾、河内長野等で、ひと・物・情報の中継点に集中していた。これらの話は秀吉と宣教師とが良好な関係であった時期で、1587(天正 15)年 7 月に秀吉の**バテレン追放令**が出されるまで。

その後、高山右近が改易され、残された家臣のうち、キリシタンたちが身を寄せたのは、堺の商人出身で、同じキリシタンの**小西行長**(1555-1600)。行長が 1588(天正 16)年に九州・肥後国南部の宇土領主として下向する前に家臣に取り立てられ、畿内から去った。外国事情に通じていた彼らは、秀吉の**朝鮮出兵**(1592-1593 年文禄の役、1597-1598 年慶長の役)の際に、小西行長のもとで、和平に向けて交渉力を発揮したと伝わる。

③摂津職関連地については、すでに**⑦天神橋**のあとで触れた。

最後は、天満橋南詰の**③京阪モール** 8 階に上り、北向きの展望スペースから、今日歩いてきた場所を思い出しながら、大川沿いのパノラマを楽しんで余韻に浸る。建物を下りれば 1 階で**京阪電車天満橋駅**、地下 2 階へ下りれば、**③大阪メトロ天満橋駅**に通じる。

今日はたくさん歩いて、お疲れ様でございました。感想等を**大剣連事務所**へお寄せください。

次回 11 月にまたお会い出来ることを楽しみにしております。

